

今、振り返る教師としての原点

私を育てた
あの時代、あの出会い

偉大なる達人との出会い



初任の長崎東
高校での2年
目、辰田幸敏先
生が長崎北陽

台高校から転任してこられました。「日本史の辰田」は、県内では知らぬ者がいない存在でしたから、そんな方と一緒に働けることを楽しみにしながらも、「今年度、自分は日本史を担当させてもらえないかも」と先行きに不安を抱いていました。辰田先生の授業は、何度も見学させていただきました。計算された展開に引き込まれ、「何年経ったらこんな授業が出来るようになるのか」と思ったものです。また、先生は、板書内容

偉大な先人を追う苦しみの中、 次代を担う真の力を身に付ける

長崎県立佐世保北高校 舟越裕ひろし

多くの教師は若き時代、先輩を真似し、追い掛けることで指導のノウハウとその本質を体に染み込ませていく。だが先輩の存在が偉大であるほど、追い掛ける苦しみもまた大きくなる。今なお続く全力疾走の日々を、舟越裕先生が語る。

などが詳細に記されたノートを見せてくださいました。生徒の間で「辰田ノート」と呼ばれていたものです。授業、ノートを見せていただいた私は、早速先生の授業を真似してみました。しかし、いくら辰田ノートがあるからといって、授業がすぐにもまくるわけはありません。しかも、1年が経った頃からは、辰田先生から「舟越らしい指導をしているか?」「オリジナル教材は作っているか?」と声を掛けられるようになり、新たな課題を示されました。

先生と長崎東高校で一緒に2年間は、正直、その指導の外枠をなぞるだけで精いっぱいでした。自分の頭で理解できるようにになったのは、五島列島の

小規模校に異動してからだと思っています。若い教師が多かったその高校で試行錯誤の中で、少しずつ指導に自分らしさを盛り込み始めたのです。長崎東高校を離れて3年後には、センター試験模試などで県内の進学校を上回る成績を上げられるようになったこともあり、教科指導の土壌を辰田先生に耕していただいていたことに気がきました。

の一番の思い出は、赴任2年目に進路指導部の一員として参加した、進路指導シラバスづくりです。高校3年間の進路指導を体系付けるため、何を、何のために、どのように、どこまで指導するのか、時系列で詳細に記述したもので、A4判で160ページ超の大作です。

辰田先生に企画の大作と資料を示していただいた上で、それらを基に進路指導部の先輩と原稿を書き、先生のチェックを受けました。特に多くの指摘をいただいたのが、行事後の指導の手薄さです。行事はやりっぱなしではいけないことは分かっているつもりでしたが、シラバスで言語化すると、行事と行事をつなぐ指導が出来ていないこと

遠くても追いつきたい

辰田先生と再会したのは、現在の勤務校である佐世保北高校です。中高一貫校として新たなスタートを切ったばかりの本校で、辰田先生は教頭を務めていらっしやいました。

佐世保北高校での辰田先生と

先輩教師の言葉

手法は変えても
教育目標のレベルは
変えてはいけない

長崎県・私立 佐世保実業高校校長
辰田幸敏



若手とベテランの力量差をそのままにしておけば、

若い先生は生徒からの信頼を失います。次の世代を育てることはベテランの仕事ですから、私は自分の作った教材などを、全て同僚、後輩に渡していました。ただ、若手も1年経てば少しは余裕が出てきます。その余裕を余裕のままに終わらせずに、自分らしさをそこに盛り込むことを求めるのも、ベテランの仕事です。長崎東高校で、教師になったばかりの舟越先生に対して厳しく接したのは、私の当然の責任でした。

佐世保北高校に舟越先生を迎えることを切望したのは私です。実は舟越先生は、長崎東高校で1年間毎朝正門に立

左 たつだ・ゆきとし 地歴科。長崎北陽台高校、長崎東高校などを経て、諫早農業高校、佐世保北高校で教頭を務める。その後、島原高校などで校長を務め、12年度より佐世保実業高校校長。

撮影◎佐世保北高校にて

右 ふなこし・ひろし 地歴科。長崎東高校、奈留高校を経て、現在は佐世保北高校に勤務。2008年度より進路指導主事。



が分かりました。制作期間は6か月に及び、校務との両立は楽ではありませんでしたが、3年間の指導の流れを俯瞰し、自分を見直す機会になりました。

完成したシラバスは、本校の教師にとって指導の拠り所となりました。しかし、あれから6年が経ち、中高一貫校として数期の卒業生を送り出した今、シラバスの改訂に取り組むべき時期に来ています。当然その仕事は、進路指導主事となった私が中心となって行うべきものですが、隠さずに言えば、自分の力不足のため、その仕事の大きさに戸惑っている状況です。中高6年間の指導を体系立て、詳細なシラバスとして可視化するための手順は？ そもそも、一層多忙化する先生方が、何ページもあるシラバスに目を通してく

れるのか？ 私が考えるべきことはたくさんあります。実は今年、進路指導部で中高の指導の流れを6ページにまとめました。シラバスに比べたらわずかなボリュームですが、これだけの作業でも、自分の中に確たる構想を打ち立てた上で仲間の先生に協力をお願いしなければいけないことを痛感しました。辰田先生のようにはまだ自

分は考え切れていないのです。分厚いシラバスの背表紙を見る度に、自分にいら立ち、胸が苦しくなります。力量があればここまで出来るといふ世界を見ただけには、辰田先生に少しでも近付きたいと思います。私は生徒に「やってやれないことはない」といつも言っていますが、それは今の自分自身にも言えます。私は諦めません。

ち、大きな声で挨拶をして、登校する生徒を迎えました。これほどの熱意を持った人を鍛えれば、きっと次代を担う教師になると思っただけです。だからこそ、シラバス作成も舟越先生にお願いしました。当時の佐世保北高校は、さまざまな進路行事の意味を十分に理解しないまま消化している状態で、教師は多忙感と疲労感を感じていました。誰もが指導の意味と要点を理解でき、充実感を味わえるようになる……そんなシラバスを作りたかったのです。舟越先生は私の思いを理解し、共に形にしてくれる人でした。舟越先生がシラバスの改訂を考えていること、そして既に小さな挑戦をしていることは知っています。確かに、まだ40代前半の舟越先生が、あのシラバスと同じようなものを作ることは難しいでしょう。教師を取り巻く状況も変わっています。しかしそれでも、教師が目指すレベルを自ら下げ、手軽な目標で満足することは許されません。制作体制を見直し、期間を長く設定するなど、方法は変えながらも目指すレベルは決して変えてはいけません。舟越先生なら出来ると思っています。